

文化による大阪の

活性化を目指して

大阪ミュージアム文化都市研究

『大阪力事典』ができるまで

栗本 智代

Written by Tomoyo Kurimoto

はじめに

「大阪ミュージアム文化都市研究会」は、平成十三年春に立ち上がった。昨今、行政を中心に、「観光」「文化」を基軸にした都市活性化への取り組みが積極的に謳われるようになり、『CEL』が主宰して、新たな視点で有意義な研究会が持てないか』と考えたのがきっかけである。大阪市立大学の橋爪紳也助教授のアドバイスを受け、観光学者の間でも着目されはじめた「エコミュージアム」という概念をベースに大阪を見直して、新たな都市像を描けないだろうか」と、大阪(関西)を中心に、まちの活性化や「場」づくりなどに携わっている中堅若手を中心としたメンバーを募り、研究会がスタートした。

平成十三年、十四年と、講師を招いての勉強会やシンポジウム、視察研究などを行い、年度ごとに中間報告書を作成した。そして、平成十五年度、それらの研究活動を世に問いたいと出版を試みた。『大阪力事典』(まちの愉しみ・まちの文化)』(大阪ミュージアム文化都市研究会編、橋爪紳也監修)と題したその一冊は、平成十六年初夏に創元社から発行される予定である。以下、これまでの活動経緯と内容を紹介したい。

背景・問題意識

「国際集客都市」、「滞在型観光の推進」、「観光立都・大阪宣言」……。二十一世紀に入り、大阪府や大阪市の財界を中心に、文化的な側面からのアプローチで、都市の活性化を図ろうとする動きが盛んになっている。従来の手法である大規模文化施設によるまちづくりについては、「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」や「住まいのミュージアム」、「大阪歴史博物館」などが平成十三年に、ほぼ完成したが、これからは八ッ木に頼るのではなく、その発信ソフトが問われるであろう。

これらの施設では、特別イベントや企画展、シンポジウムなど、これまでもいくつか興味深いプログラムがあったのは確かだが、常設の新鮮味が薄まっていく今後は、さらなる健闘が必然となる。また、民間発の複合商業施設開発が、今年も計画されているが、いかに力ネが落ちるかだけでなく、いかにその「場」でしか体験できない独自のいい時間を過ごさせるかということがポイントになってくる。

一方で、既存の文化資源に着目し、その魅力を再編することが必要であろう。実際、

大阪には、数多の貴重な文化的な資源が散在しているが、現代的な視点での編集や発信ができていないため、魅力ある文化コンテンツとして機能していないのが現状である。改めて今日的な意味を捉え、文化遺産ではなく、今生きて呼吸をしている文化遺産として、その価値を認識してもらうことが大切ではないだろうか。

「ミュージアム文化都市」 大阪の可能性を探る

こつした中で、新たな活路を見出す視点として、当研究会では、改めて大

阪を俯瞰し、まち全体を「文化の博物館」「ミュージアム文化都市」として捉えることを試みた。各々の博物館的な文化コンテンツの魅力を抽出し、その意味合いを確認すると同時に、ネットワークづくりも意識しながら編集し、文化的なコンテンツがあちこちに咲きながら、ゆるやかに繋がっている「文化都市」大阪のあり様を探りつつある。研究会活動としては、そのプロセスを含めて発信しながら、整理と再編を行うことで、多様な個性的な文化を抱く都市・大阪像を改めて描く作業を、さらに続けようと考えた。

「エコミュージアム」の視点から、 文化的コンテンツ抽出へ

(平成十三年度)

研究会では、大阪全体を「活動するミュージアム」として捉えることで、「新たな見方により、改めて大阪を魅力ある都市として描くことができるのではないか」と考えた。そのベースとして、フランスで提唱された、地域を博物館として見直す「エコミュージアム」の概念や実例を参考にしたいと専門家を招き、そのイメージと手法、地域の特性による応用事例を学んだ。

「エコミュージアム」では、市民が暮らす地域の中に自然や文化遺産(人や技術も含む)が生き生きと保存され、新たに名所や魅力ある資源の発掘・創造も行われている。活動の主体は市民であり、公的支援やボランティアの力も活用している。住民発だが、外部からの来客にとっても、観光名所に値するホスピタリティが備わっている。ここには、いくつかの段階があり、ルーレットのように順をめぐるという。その諸段階を橋爪紳也氏が描き直した表現によると、地域の歴史や自然などに関する知識を整理し、その価値を再確認し遺産として整備、対外的には情報発信を行い、市民や来街者を含めて地域を愛する誰でも



博物的新大阪文化名鑑

を仲間とみなし、批判をしあいつつも運動の継続を確認し、地域の発展に寄与する「次の段階」を模索、謙虚に当初の段階に立ち戻る。

これらを大阪に置き換えて思考すると、その初期段階のことさえ十分に行われていないことを痛感し、まずは研究会で、手をかけることにした。大阪には、貴重な文化的資源が置き去りにされていたり、価値があるのにあまり注目を集めていなかったりする文化的コンテンツが非常に多い。これらを抽出し、その価値を再確認し、同時に芽生えたばかりの「場」や活動も取り上げることにした。その中間報告書として、「博物的新大阪文化名鑑」と題した冊子を作成したわけである。

そのプロセスの中で、「再生・リサイクル・リニューアル・リプロデュース」というキーワードが浮上してきた。

個性と魅力ある「場」づくりへの 試みから学ぶ (平成十四年度)

平成十四年度に入り、六月に公開研究会も兼ねたシンポジウム「活動するミュージアムとしての大阪」を開催した。「再生」というキーワードを意識しつつ、「文化によ

るまちづくり」という視点から、実際に場づくりや賑わいづくりに携わっている方々などをゲストに招き、現場の事例を研究し、エコミュージアムの概念から大阪を見てみようという試みであった。時間不足で十分な議論にまでは到らなかったものの、総じて好評をいただいた。大阪で新たな試みを



シンポジウム「活動するミュージアムとしての大阪」の案内状

実践しているまちづくり活動やキーマンが一堂に会する「博覧会的シンポジウムが新鮮で刺激的であった」という褒めの言葉を多く頂戴した。

その後、さらに「文化による新たな「場」づくりの事例を研究したいと視察を行った。「活用することで貴重な文化的遺産を今に生かす」試み、そこへのこだわりやセンス、まちや「場」の活性化のための新しい挑戦、既存の土地や建造物をベースに、ある意味でゼロからの出発を試みた事例などを主に選び、各々直接の担当者の方に「案内いただいた。それらの視察を中心に、シンポジウムの内容も盛り込み、中間報告書を作成した。

平成14年度中間報告書概要

大阪における ミュージアム文化都市への ムーブメント

大阪の長屋再生への試み(「空堀商店街界限長屋再生プロジェクト」)

規則も総会もない町づくり運動(「平野のまちづくりを考える会」)

空家再生からはじまるコミュニティ再生(中崎町「AManTO」)

「公設民営」による、先駆的な芸術拠点づくり(「新世界アーツパーク事業」)

公共施設の再活性化に取り組む市民運動(「おんなの目で大阪の街を創る会」)

新しいビジネス導入による近代建築の活用(「生駒ビル」「堺筋倶楽部」)

今に受け継ぐ大阪モダニズム(「伏見ビル」「大阪ガスビル」)

旧型・専門型商店街の活性化(「立花通り商店街」おこし)



大阪ミュージアム文化都市研究会活動報告書
(平成14年度)

『大阪力事典』の作成・出版へ

(平成十五年度)

二年間の活動を省みて、今後、本研究会での取り組みをいかに世に問い、活かしていくかを議論・検討した。初年度に手がけた文化的コンテンツの整理と編集(「博物館新大阪文化名鑑」)については、中間報告的な位置づけで実験的に行ったものであったが、その後非常に反響があり、これを完成させたいという考えがまずあった。さらに、それをベースに、いくつかのコンテンツを繋いでトレイルを提案し、新たなミュージアム文化都市としてのテーマ性を持つ大阪像を描きたいという思いもあった。

しかし、後者の手法を考えると、本研究会メンバーの各々の立場では集中的に取り組みにくいのと、新たな都市像を提案する論文や提案集を出したところで、ペーパー上だけで留まるのではないかと、という懸念もあり、まずは、前者のコンテンツ集を完成させ、今後の展開への貴重な資料として活用してもらおうという結論に達した。出版・編集の目的やターゲット、体裁、内容など、何度も議論を繰り返し、コンテンツの抽出、執筆および適任者への執筆依頼など、メンバーで手分けをして行った(会合数とメール

でのやり取りは、数えられない程の頻度となった)。橋爪紳也氏の指導を受けながら、取りまとめと最終決定は栗本が行い、編集

作業は研究会メンバーでもある原章氏が進めてくださった。
以下に、その要点の一部を紹介する。

大阪力事典〜まちの愉しみ・まちの文化〜

編集：大阪ミュージアム文化都市研究会、監修：橋爪紳也

出版目的

大阪に点在する各々の“文化”の魅力と可能性を紹介。大阪を支える文化力の潜在性と、今後の大阪活性化に向けての素材として活用してもらおう。種本としても位置づける。

ターゲット

行政、企業、NPOなどのまちづくり担当者から一般の方まで。対象年齢としては、二十代後半〜七十年代。

編集のポイント

*現在の大阪文化の意味合いを「柱」であるA〜Zでグルーピング。

この柱と注釈で、編集者の視点を表現し、大阪文化の特徴をあらわしている(全体的に大阪文化のコンテンツを網羅するの

でなく、今後大事に育て、活かしたいモノ・コトに焦点を当てた。「再生・リニューアール・リサイクル・リプロデュース」的な視点も重視)。

*そこに各コンテンツを配置し、「過去、現在、未来への展望」を意識しながら、一般の人にもわかりやすい読み物になるよう、研究会メンバーだけでなく各専門家に執筆を依頼(計七十八名)。大学教授、建築家、住職、クリエイター(美術関係、演劇関係、放送関係ほか)、主婦など、主に関西を拠点に活動する方々に、一般的な事実だけではなく、考察や主観も盛り込んでいただいた。資料写真も可能な限り入れた。

*編集のプロセスとして、A〜Zの持つ意味についてチャート図化を試み、紹介。

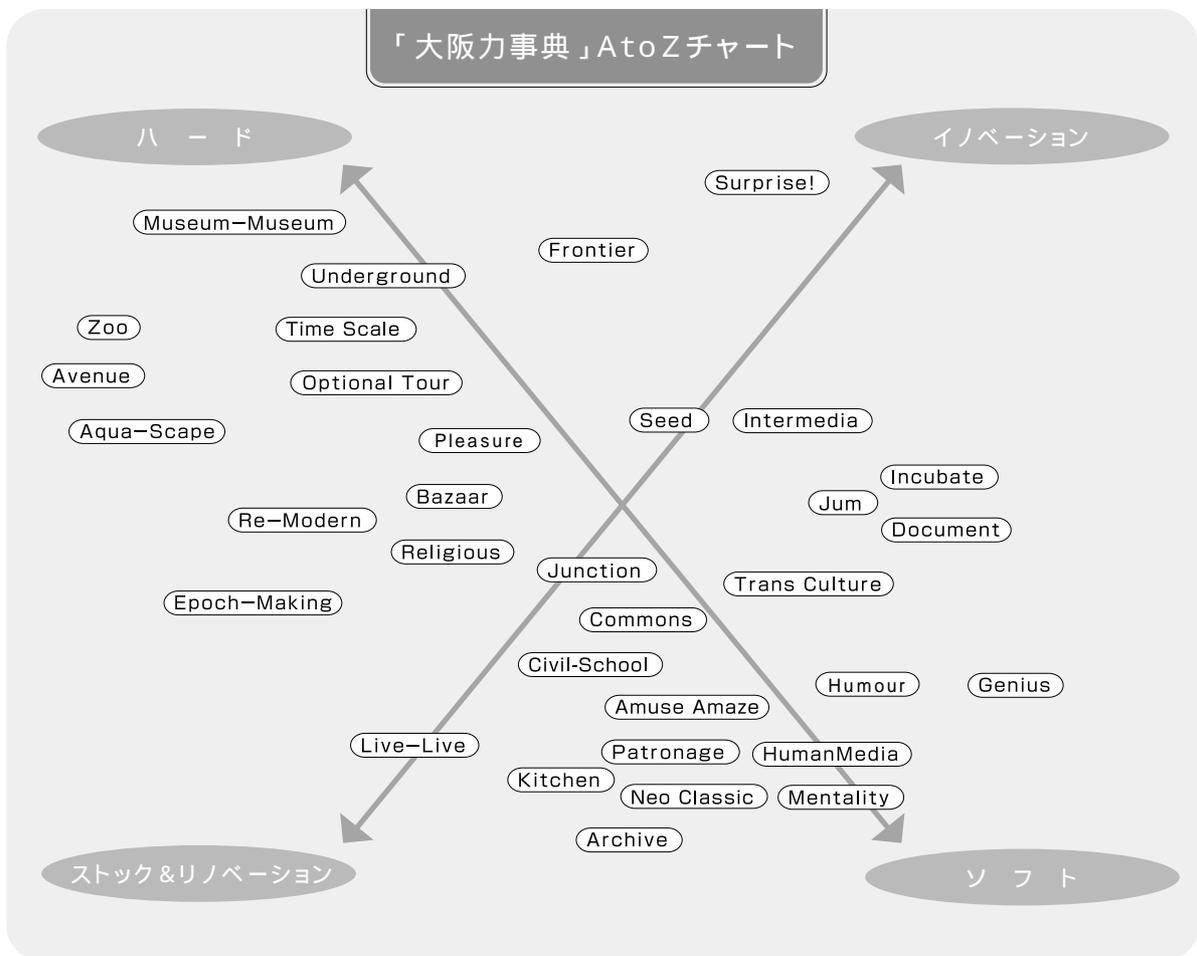
*付録として、まちづくりに関係するNPO団体一覧を掲載。

*索引を充実。事典として調べ物にも活用してもらえよう工夫。

.....まえがきより.....

本書では、特に大阪の文化について、今に生きる私たちにとつての魅力と可能性を探ろうと試みた。そしてそれらの総和やゆるやかなつながりが、大阪に新たな活力を生むのではないかと考えたのである。『大阪力事典』まちの愉しみ・まちの文化』というタイトルではあるが、大阪を形づくってきた歴史や文化の総覧ではなく、大阪という地域文化の“今”を理解していただく方針で編集している。網羅することが目的ではないため、紹介できなかった項目が多数あるが、ご了承ください。

本書は、事典方式にAからZで構成されている。このAからZのキーワードが、大阪文化に対する編集者（大阪ミュージアム文化都市研究会）の視点であり、大阪を特徴づける主要な柱として、日本語での注釈にその「トク」意図するところ」を表記している。参考のために編集者が考えるAからZの相関図を紹介しているので、参照いただきたい。それぞれの関係を示すために、今回はソフト」vs「ハード」、「ストック&リノベーション」vs「イノベーション」の二軸を用いた。「ソフト」は「JITの力」、「ハード」は「場所の力」。例えば、Mentality（大阪人気質）は、人そのものに属する傾向を持つためソフト側、Avenue（大阪南北筋文化）は「道」という場所に関



わる文化なのでハード側といったように、より性格が強い方へ配置した。もう一方の主軸である「ストック&リノベーション」は、遺産とその再活用・再生への試み、「イノベーション」は新たな革新的事象や活動という意味合いを持たせた。例えば、「Live-Live(住まいと暮らした大阪文化)」は前者だが、「Incubate(文化「卵」の応援装置)やJunk(手作りの都市の祭り)は、新しい文化を生み出すとすると、より革新的な試みとして後者へ位置づけた。しかし実際のところ、文化はそれを手がけた「人」と「場所」の双方の掛け算により成立するものがほとんどであり、また大阪にはまちのストックを活かしたイノベーションが多いのが特徴である。その代表的なSee&まちに芽吹く新しい種)には、住民主体のまちづくり活動や長屋再生イベントなどが盛り込まれている。

一つ一つの文化的項目自体、複数の柱(A、B、C)にまたがる内容を持つものも多く、相関図としてA、B、Cのキーワードの位置を定めるのは難しい作業であった。当研究会メンバーの中で飛び交った様々な意見を一旦定着させたが、完成形とは言えない(完成形はないかもしれない)。大阪文化の今を捉える本書の編集作業の、プロセス・一試案としてご理解いただき、大阪のまちや文化に関して語り合うきっかけにしたいだけあればありがたい。これまで蓄積された様々なストックのリノベーションやそこから始まる多くの



チャート図を作成中の研究会メンバー

イノベーション、同時にその場に関わる人から、たくさんの可能性が見出せるに違いない。(前ページのチャート図参照)

このような枠組みで選定された項目について、編集者が「今これを書くならこの人」と選んだ各執筆者の個性溢れる文章が展開される。気軽な読み物として、前から順番に通読していただいてもいいし、興味ある項目を拾い読みしていただいてもかまわない。項目索引と執筆者別項目一覧を最後に掲載しているの、そちらからの検索も可能である。また、付録の「大阪のまちづくりに関わるNPOなど住民グループ一覧」についても、全てを網羅するものではないが、まちを支えている大阪の活力源として参考にしていただきたい。

(大阪ガスエネルギー・文化研究所 主任研究員)

CEL

研究会メンバー(敬称略)

主査

大阪市立大学大学院文学研究科助教授
橋爪 紳也

メンバー(順不同)

大林組本店開発企画部 大西 二州
乃村工芸社 近畿総事業部事業開発研究所
長谷川 里江
編集工房レイヴン主宰 原 章
大阪歴史博物館学芸員 船越 幹央
吉村企画室主宰 吉村 美貴
扇町インキュベーションプラザ 山納 洋
まちづくり工房 早川 厚志

運営事務局

大阪ガス エネルギー・文化研究所 栗本 智代